

# 狩

獵採取社会の人々が、現代人より健康であったかといえは十中八、九、その逆であつたらう。しかし、当時の人々の健康状態はかつて想像されたほど劣悪な状態ではなかつたことも明らかになつてきている。天然痘や麻疹、風疹、水痘、インフルエンザといった感染症は存在せず、癌や循環器系疾患を引き起こす環境要因も現代に比べてはるかに少数であつたに違いない。

## 人類史から見た、感染症とパンデミックの起源

である。感染症をこうしたマクロな生態学の立場から理解しようとした本に『伝染病の生態学』という本がある。著者のF.M.バーネットはオーストラリア生まれのウイルス、免疫学者だ。クローン選択説や免疫の寛容に関する基礎研究で一九六〇年のノーベル生理学・医学賞を受賞した。やや古い本であるが、生態系や、その変化の中で感染症を考えるうえでは新鮮でさえある。環境破壊や地球温暖化が地球規模の課題となる中、感染症をそうした問題と併せて考えるうえでもお勧めだ。

『疾病と世界史』の著者のウィリアム・H・マクニールは、文明システムは感染症を貯蔵する装置として機能し、感染症の定期的流行は集団に免疫を付与してきたと言う。それぞれの文明は固有の感染症を貯蔵し、文明圏に属している人々は固有の感染症に対する免疫を獲得する。こうした疾病レパートリーを持つたそれぞれの文明を「疾病文明圏」と呼ぶ。異なる文明圏では戦争や交易といった接触を通

して疾病の交換が行われ、それぞれの文明圏における疾病レパートリーは増加する。同時にそれぞれの文明圏の持つレパートリーは均質化していくというのがマクニールの主張である。

ヒマラヤ山麓地方の風土病であつたペストの中世ヨーロッパにおける大流行も、こうした視点に立てば、ユーラシア大陸での疾病交換と均質化の過程だつたとみることが出来る。著者はカナダ生まれで、一生を通じた研究テーマは「西洋の台頭」であり、西洋文明が他の文明に及

ぼした影響であつた。が、著作を通して感染症研究者に与えた影響は大きい。私自身、この本を読んで、感染症に関わる学問の道を志したという研究者に欧米で教多く出会つた。

進化生物学者のジャレド・ダイアモンドもその一人だ。彼は『銃・病原菌・鉄』の中で、ヨーロッパ人が他の大陸を征服することに成功したのは、ユーラシア大陸の環境要因で、家畜との接触を通じ、感染症に対する免疫を獲得した強さなどによると説いている。

ことを言つていても、やつていくことは違つてはいないかと。この本の主人公、備中松山藩の山田方谷は、一〇万両の借財をわずか八年で一〇万両の蓄財に変えた財政の天才です。藩の危機を救つた手腕は吉宗や鷹山を凌ぐといえます。最後まで信念を貫いて激動の時代を駆け抜けた改革の巨人。私にとって、手本としたい一人です。

**経営者の一冊**  
management  
アサヒビール社長  
**萩田 伍**

『炎の陽明学 山田方谷伝』  
●矢吹邦彦著 明徳出版社

代小説の楽しみ方は二つあると思います。池波正太郎や司馬遼太郎は読むと「よっしゃ」と元気になる。一方、藤沢周平などの、江戸の名もなき貧しい人たちが、自らに厳しくひっそりと生きる姿は自分の生き方を見つめ直す参考になります。我々経営者は常に社員から見られており、見抜かれてしまいます。格好いい



『銃・病原菌・鉄』(上・下)  
ジャレド・ダイアモンド著  
倉骨 彰訳  
草思社  
本体価格各1900円＋税



『疾病と世界史』(上・下)  
W.H.マクニール著  
佐々木昭夫訳  
中公文庫  
本体価格各1143円＋税



『伝染病の生態学』  
F.M.バーネット著  
新井 浩訳  
紀伊國屋書店  
本体価格1300円＋税